

「ソフトボール」

# 中村 藍子

NAKAMURA Aiko

自分が選んだ競技の道  
失敗しても楽しさにつながる

「中学でソフトボール部を選んだ理由は、監督さんが格好よかったからなんです」と冗談めかして語る中村藍子さん。きっかけはささいなことだったが、その後もソフトボールを続ける道を選んだ。高校、大学を経て、実業団ソフトボール部に所属。一度引退してオーストラリアでのワーキングホリデーを経験した後、改めて別の実業団チームのトライアウトを受けた。新たなチームはアマチュアも参加する大会からスタートし、4年かけて日本リーグ一部に昇格。2013年には一部での開幕戦を初めて勝利で飾り、中村さん自身も開幕戦本塁打を記録した。チームとしての成果を区切りとして、中村さんは同年にプロを引退。ジムのインストラクターなどの仕事をする傍らで、ソフトボール選手としての経験を海外で生かしてみたいと思うように

## JICA Volunteer Story

PROFILE

中学時代から19年間ソフトボール選手(学生・実業団)として活躍。その経験を海外で生かすチャンスを探り、青年海外協力隊に参加。2017年1月からボツワナソフトボール協会のアシスタントコーチを務める。



現在、指導を担当している女子代表の選手たちと(左端が中村さん)

# 「国技ソフトボールを楽しく教える」

中学時代に始めたソフトボールの道を進み、選手生活を「所属チームの一部昇格と日本リーグ一部での開幕戦勝利」で締めくくった中村藍子さん。その経験を海外で生かす場を求めてたどり着いたボツワナで、国技ソフトボールを楽しみながら指導している。



なった。そんなときに見つけたのが、青年海外協力隊だ。青年海外協力隊では、さまざまなスポーツ種目で経験を積んだ人たちを、世界各国に指導者として送り出している。その根底にあるのは、スポーツは人を育てるという考えだ。中村さんが派遣されたのは、世界最大のダイヤモンド山や、豊かな自然を楽しむサファリ観光の名所知られる南部アフリカの小さな国、ボツワナだった。現在は同国ソフトボール協会のアシスタントコーチとして、男女代表チームから地域チーム、学校など、要請に応じてさまざまなチームの指導に走り回っている。「家の近くで練習していたチームを通りすがりに指導したこともありですよ」という言葉から、中村さんが骨の髄までソフトボールが好きなのだと伝わってくる。「ソフトボールは自分で選んだ道。何となく失敗しましたが、それも楽しさに変えてきました」と話す。

ロンドンオリンピックでは競技種目から外れた野球とソフトボール。あまり普及していない国も多い中、ボツワナではソフトボールは国技とみなされている。学校の授業でもソフトボールを取り入れており、人口225万人に対して競技人口は4万人に上るといわれる。なかなかのものだ。「ボツワナの人々にとって、ソフトボールはとても身近なスポーツで、多くの人がプレーしています。ただ、あくまで楽しむためのプレーで、競技のための基本動作が身に付いていないので、国際大会を目指すためにはちゃんと指導が欠かせないと感じています」

グラウンドはあるが貧富の差が激しく、道具を買えない選手もいる。「JICAや日本大使館の支援で購入できた道具を大切に使用してくれているのを見ると、この選手たちを指導できて良かったと思います」と、中村さんは語る。

## 「努力して手に入れる」感覚の薄さ 自分の行動で手本を示す

ボツワナは独立から52年の間、特に戦争・内戦などに悩まされることがなかった。さらには、ダイヤモンドに由来する豊かな財政のおかげで、人々は国から十分な教育機会



a.ボツワナ女子代表は無事、世界選手権出場を決めた。まずは本戦、その次は東京オリンピック出場が目標だ  
b.アフリカ予選で出会ったジンバブエ代表チームを見て気付くことがあり、その場で指導を始めた中村さん(中央)  
c.昨年10月にはWBSC総会に参加。日本ソフトボール協会がアフリカ全土に用具を寄贈した  
d.現役時代の中村さん。今でもソフトボールが好きで、失敗も含めて楽しいと語る

や社会保障を与えられてきた。「そのためか、争うことを好まず、努力して何かを手に入れようというハングリ精神とは縁遠い文化が育っています。とても明るく、気さくな人たちなのですが、厳しく指導するとすぐに諦めてしまう傾向があるんです」と中村さんは話す。「お国柄を変えることはできませんから、私はプレーでもトレーニングでも率先して動くことで、選手たちにコーチとしての私を認めて、ついてきてもらえるように、常に努力しています」

「ごみを拾おう。グラウンドをきれいに保とう」。中村さんは練習の最初に、そんな掛け声をかけている。言葉だけでなく、自ら行動することで、徐々に選手たちもついてきてくれるようになった。かつての教え子の一人は中村さんの教えた、日本式に感銘を受け、「今は練習にごみ袋を持参して、必ずごみを持ち帰っている」と話してくれたという。

中村さんの指導の下、ボツワナ代表は着実に成果を積み重ねている。昨年7月には男子代表が世界選手権初のベスト8に入る健闘を見せ、守備担当のアシスタントコーチを務めていた中村さんも、チームの活躍を祝う大統領公邸での昼食会に招かれた。現在、打撃担当アシスタントコーチを務めている女子代表は世界選手権の予選を無事勝ち抜き、8月に千葉で開催される本戦に向けて練習に励む毎日だ。加えて東京オリンピックへの出場という大きな目標があるが、そこには、欧州とアフリカを合わせて1という厳しい出場枠争いが待っている。チームと共に自分自身も成長していこうと、中村さんは腹を決めている。

ソフトボール協会に勤務している中村さんは、昨年、ボツワナで開催された世界野球ソフトボール連盟(WBSC)の総会に日本のホスト役として参加した。2月には中京大学のソフトボール部員20人が1カ月間、JICAボランティアとして遠征に訪れ、代表との親善試合や全国巡回指導を行った。そうした成果の一方で、代表合宿などの集中指導の機会だけでなく、普段からもっと指導の機会をつくっていきなさいという気持ちも強い。「ボツワナで出会った同じ日本人から、楽しむ努力をするということをお伝えしてもらいました。人生を楽しみ、向上を目指し続けたいと思います」。中村さんの思いは、常に未来を向いている。